スペイン革命におけるCNT (13)

ホセ・ペイラッツ
今村五月訳

第一四章　連合による協力の結果（つづき）

この会議の最も重要なことは第四点に関し採択された見解で、それは短い前置きの後に次のように述べている。

「第一、土地集産化の確立に着手するにあたり、小土地所有者が我々の解放に一時でも不信を抱くことなく、従って我々の事業の敵、妨害者や怠業者にならないために、まず第一に、彼ら自身の腕で耕し、それが集産化された核にとって発展の妨害あるいは困難とならない限り、土地を耕作することを認めるであろう。

我々がおそらくあえて達成するだろうところのものは、機械と化学と技術とを通して耕作形態の変更を行なう時、土地の集産化がおのずからもたらすであろう模範、最小の努力で最大の生産性を上げる、従ってまた、労働者のより高い新しい生活をもたらすであろう模範によって獲得されるだろう。それは労働者全体の道徳的精神的状態をも高めるだろう。それを我々は確信している。

第二、接収された全ての土地は組合によって統制管理されるだろう。そしてそれらを組合が集団的に耕作する時は組合の、即労働者全体の利益に反映しなければならないだろう。

第三、同様に組合は、全生産の統制と、同じく地方的には前述のような直接耕作が続けられる小土地所有者による物資の統制をも、行なうであろう。

第四、集産化された核をもたなければならない組合の関係を通じて、一定の場所で余っている者を、土地が余って労働力が足りない所へ移すことを認め、全労働者の間に平等の原則を実施するような農民統合の形態が追求されるであろう。

第五、各村の組合はそれぞれの地域を守り、以下の指示に沿って、村の他の農民の考えと、CNTの組合を導いている絶対自由の規範とを統一するために努力するであろう。

a　我々がすでに指摘したような困難に出会う危険もなく村に集産体を建設する可能性があるなら、全的にかつ即時にそれを建設するべきである。

b　地域の農民の大多数がこの判断に同意しない、あるいは何人か同意しない者がいるなら、組合は前述のように小土地所有者の耕作を尊重し、大所有地とファシスト分子の財産を接収するだろう。これらもまた集産化されるだろう。

c　もし住民の要求がそう促すなら、組合は、決定的な集産体の建設準備が要する最小期間、土地は然るべき準備が整えばいつでもすぐに集産化できるようにしておいて、小土地所有者について述べたと同じ形で小作人たちに耕作させる権限を残しておく。

農民の解放は、集産化された養鶏場の設立を完成させるだろう。そこでは近代的牧畜の大胆な実現に要する前払い金の全部が分担されるだろう。さらに、最も辺びな地方の中心部の電化、開発、衛生、そして灌漑、整地、排水、要するに無限の改善は、全ての新しい建設にあたって成功の最大の可能性に貢献しつつ、CNTの大前提に含まれている最も高貴な願望へと全農民を説得する道を進むための、最も生き生きした刺激となるだろう。

この見解の終りに、そして常に連合が基礎とした連合主義の忠実な運用として、当起案委員会は、農村各地方に以上の決定を遂行する形態と機会を選択する最大の自由を与えるよう要請することを好都合と考える。」

九月中旬、マドリッドで地方連合全国大会が開催される。そこで防衛全国評議会創設の決定が出される。同月一二日、バルセロナの『CNT・FAI情報通信』によって次の覚書が発表される。

「工業ならびに農業労働者は、現時点の責任を自覚して、組合組織とアナキストグループの地区ならびに地域連盟代表者の地方大会に会合する。CNT・FAI館の会議室で、大会は夕方四時に議事に入る。代表たちは熱心に、希望をもって革命に関する諸問題を討議する。これほど関心をひく大会はめったになかっただろう。組織はその代表者大会とともに労働者、全員の福祉に価する労働者との直接の接触を得るのである。」

この合同大会では防衛全国評議会に関することは討議されただろうか？　召集の唐突さと、採択された決議に関する報告の秘密処理が、それを知ることを許さない。一方、カタルニャのCNT地方委員会は一八日に翌一九日の地区地域大会の召集を出す。その中では地方連合の機構、農民地方委員会の設立、地方連合全国大会に出席した代表の報告が、問題にされている。同一九日、地方連合全国大会によって採択された「経済的再建と革命の防衛」に関する見解が発表される。（現在の政府方式を防衛全国評議会によって交替することに関して、政党と組織に提案）

第一一章で我々は九月二四日に開かれたカタルニャ組合地方大会に言及した。それは当時までに開かれたもののうち最も重要なもので、三二七組合が代表を送っていた。同章で行なった素描をたどってみると（地方委員会書記と経済評議会のCNT代表とからの報告）、大会の純粋に経済的な性格に気づくのである。そのことは家族給に関し採択された次の決定が実証している。

「最近、前線で戦っている同志たちの家族に対して、現在のような額の給料を支払い続ければ、カタルニャの経済を維持していく可能性はないということがはっきりした。カタルニャの農民の相当部分が、生きるために必要な食料物資の入手を許される経済手段をもたないでいる。完成した集産体の多くでは、労働者たちは、カタルニャの残余の地方の給料とはかなり不均衡なやり方で

各自の給料を追求し、しかもそれを蓄えることを許すような資金を手に入れた。生活物資の不足であれ、商人の利己的精神が原因であれ、消費物資の価格は、ファシズムに対する戦闘が始まって以来著しい率で上昇した。十分な給料の追求を許す資金をもたない、完成した、さらには計画中の工業ならびに農村の集産体も存在する。また、生産しないで生活し消費している寄生的人間がかなりの高率で存在することも考慮に入れなければならない。最後に、危険の存在することを知らせよう。もしこれまでどおり続けば、嫁動してきた工業や農村では資金が涸渇し、その結果、資金は給料を支払うためにも原料を得るためにもなくなり、一方ではさっき例にあげたような富める集産化工業が個人資本を蓄積していくのである。

これらの理由と、望むなら他にも示すことができる諸理由とから、当起案委員会は、組織の道徳と正義と責任との原則によって、給料を調整することを認める必要があると考える。

1、独立している個人に対する日当として週一〇ペセタ。

2、個人の日当を基礎として家族に給与階梯を設けること。

家族の長あるいは第一生産者は一人分の日当。

第二生産者は日当の五〇パーセント。

第三生産者は同じく二五パーセント。

その他の家族は同じく一〇パーセント。

このように家族に一人、二人、あるいは三人の生産者がいれば、日当の当該パーセントが認められ、肉体的な無能力や病気や老令その他で生産者とみなされない家族構成員には前述の一〇パーセントが認められる。

技術者の場合は特別で、その決定はそれぞれの部門と組合の内部で十分慎重に扱われて決定されるだろう。これらの分子の中に、新しい世界の建設のために苦闘している人々への責任感と愛情のあることが望まれる。生産に役立つ全ての市民は生産しなければならない。個人資本を集産化し、あるいは供出すれば、監査人たる委員会以外は誰もどんな金額でも銀行機関から引き出すことはできないだろう。

食料品の価格は一地方内で同一になるだろう。調整された給料が許す経済的手段で食料、家賃その他の必要を全て満足することができるように、カタルニャ地方経済評議会が調整にあたる。この作業のために、当起案委員会は給与制度と階梯の均衡化について深く研究する必要がある。これは一週間の期限で完了して諸組合にかけることを約しての作業である。」

すでに別の個所で述べたが、この大会は、二日続き、その閉会の翌日九月二七日に、新聞はCNTの自治政府への参加というセンセーショナルな報道を流した。

大会は政治の問題、いや、より具体的には政府への参加の必要の問題を取り上げたのだろうか？

発表された概要はそれを知らせていない。いずれにせよ、大会は既成事実の追認しかできなかったのだと言うことができる。それはもう何度も引用した『CNT・FIA情報通信』によって二八日に発表された次の解説から明らかである。

「カタルニャ統一組合大会の任務は、その主要な決定がすでに実行に移されており、ヘネラリダット新評議会によって世論に示された声明の、最も徹底的で最も広範囲に建設的な表現のとおりであるにせよ、終了したのではない。消費の必要に応じた生産の調整、農村の大所有地の集産化と小農地所有の尊重、大工業・公共事業・輸送の集産化、生産物分配における協同組合体制の強化、農業労働の新しい組織で吸収しうる労働者を農村に帰すこと、新しい工業の創設、カタルニャ全体の電化、等々は、この間のオリンピアの集会で討議されて、それらに関して代表たちの満場一致の決定が下された主題の脈をなしていたのである。我々の同志ファブレガス、ドメネチ、ガルシア・ビルランの新評議会への参加と、他の面々の協力的忠誠は、我々が効果的かつ革新的な建設期に入ったことの保証となるであろう。」

今問題にしたばかりの決定のとおり、政府への参加と、政治的綱領の採択は、みなわずか二四時間内のことなのだが、連合主義への反逆を確証するものだ。

一〇月二日、CNTとFAIの地方委員会は、同月八日の教育者地方大会を召集する。アナキスト・グループと組合との代表を審議決定するために召集されたのである。大会はシネ・アメリカで開かれる。計三六万九七七人の加盟者を代表する組合代表一六三人と、グループ代表二四人が出席。予想外のことで、大会には加盟者二二七〇人を有する学会と文化団体の代表一五人が参加したが、報告者として承認される。CNT地方委員会書記長アリアノ・R・ヴァスケスが、会議は、オリンピアで開かれて経済的再建を取り上げた地方大会によって構想された綱領に従う、と発表。この大会の主要目的は文化問題の検討である。新統一学校委員会のCNT・FAI代表が、CENN（新統一学校委員会）によって守られている教育体系は「教師は間に合わせの思想を押しつけて児童の思想を歪めるという罪を絶対に犯さない」という基本に則っていると主張し、信仰告白的教条的でない特殊団体も含む緒組織によって維持されている理性的学校が活動を続けられるように、委員会で定められているとつけ加える。

一〇月二二日、CNT、UGT、FAI、PSUCの代表部は周知の統一協定に署名、二五日に記念闘牛場で大集会を開く準備にかかる。同二二日、地区地域大会が召集されるが、そこでの唯一の決定は二六日に組合地方大会を召集するということであった。二四日に発せられた召集状には、議事日程として、労働者総同盟との協定の検討、自治体評議会に関する方針、地方委員会書記長の辞任と新任が記されている。

一〇月二七日の『ソリダリダッド・オブレラ』は次の大会報告を載せている。

「昨日午前、組合地方大会は議事を開始した。大会には四百組合を代表する五百八十人が出席した。地方委員会書記長の同志ヴァスケスが、書記長の名において、現在内部的にもまた反ファシズム運動に参加している他の諸組織との関係についても連合組織に提起されている諸問題の全てについて、詳しく解説する。報告の中では、日ごとに必要の度を増す節度の維持のために、革命的全組織の間に最大の一致を見出すよう努力し、可能な場ではまた我我の見解が最大の優勢を得るよう努力した、と強調された。このような広範で詳細な報告が終ると、数人の代表が発言して、各自異なる見解を陳述した。が、重大な不一致は明らかにされなかった。どの組織も現在のような情況では連合の規範を厳重に遂行するよう要求することができないことを知っているためである。そ

れでも、代表の多数は、可能な時は常に底辺の組織すなわち組合に相談するようにというもっともな願いを表明し、委員会に対して、特別の場合以外はその職権を行使しないよう要請した……。

この大会で最も記録するに価することの一つは、連合組織が基本原理の純粋性と、それに基づく規範とを守っている熱意である。同様に、着いている任務の高低に関係なく、全てのメンバーに行きわたる率直さも、称賛に価する頼もしいことである。我々の組合の革命的幹部のこの態度は、スペイン・プロレタリアートの将来にとって最大の保証である。大会の決定を予想できなくても、このことを確認したことを我々は祝福することができる。カタルニャの連合組織は、社会的動乱にもかかわらず、そのイデオロギー的精神と、その連合主義の規範への忠誠とを持続するのだ。いかなる時にもこれなくしては、連合組織は不可抗的な要求という現実との接触を失ってしまうだろう。

FAI半島委員会の理論的な発言と、UGTとの協定に関する批判的検討の後、オスピタレート・デ・リョブレガトの組合から、この興味深く実り多い論争を終わらせるための提案を出していった。論争が終始たどった経過の当然の結果として、また、前もって的確な説明がなされたために、次のバルセロナ建設業組合の提案が採択された。『協定は会議と大会の我々の願望と目的と決定を満足するものであるので、出席した全代表がそれを認めるものであるが、それは、他の場合に通用していた原則の未熟であることを単純に証明するものであるので、我々は、議長に対して、大会にこのことを認めるのか否かを問うよう提案する。認められた場合には地方委員会はそれをCNTに伝達し、スペイン全土にゆきわたらせること。』満場一致で採択された……。」

「第五部会――この部会では全日程のうち最も困難な問題が提起されていた。地方委員会書記長が辞任したことで、この時期のこの辞任の重大さは誰にも見逃すことができない。討論の段階ですでに、辞任は承認できないし、同志ヴァスケスがそれを撤回不能として主張するだろうと考える十分な理由もないということに集約されるだろう。我々の予想は部会が始まるとすぐに証明された……。」

第一五章　集産体

スペイン・ブルジョアジーは、近年の封建制の残滓から脱け出るということを知らなかった。土地、銀行、企業の所有者も同じだった。一九一四―一八年の戦争は工業、商業、銀行の繁栄を決定的なものにした。ブルジョアたちは自分たちの利益を国全体のものにする自発性と意志を常に欠いていた。彼らはその利益を償却するだけであって、一方では労働者の要求に対して厳しい非妥協性をもっていた。いずれにせよ、資本は、スペインで最も有利な企業の一つである国家の金庫へところがりこむのだった。

政治的経済的に極めて多難な時代に、銀行業は最も繁栄していた。その株主たちは生産低下と海外貿易の危険とで物価をつり上げて富み栄えていた。

官僚制は年ごとに強大になっていた。それとともに予算、国庫負担も増大していた。こうした事情が外資の進出を容易にした。それは支配者の事業である独占の進出でもあった。銀行は三、四の財閥

かイエズス会の代理人によって占有されていた。

合衆国は電話技術の事業で進出を開始、イギリスとカナダは前世紀中葉に電気、造船、鉱山、運輸等の事業の支配を確立していた。ベルギー、スイス、フランスは、電車、ガス等の事業で利益を確保していた。ドイツは化学工業だった。

事実上、小商業と小工業がスペイン人の手にあるだけだった。大工業や重要商業は外国会社、特にイギリスのものだった。

英国資本はビルバオの鉱山地帯にあってすでに独占的であり、すでに土着資本と結合していた。リオチントの銅山はイギリスが有していた。この企業はその地域では他の金属鉄鋼も支配していた。そこではロスチャイルド家が有力で、スペインの他の企業に伍して鉄道とアルマデン銀山を持っていた。

アルミニウム工業と機関車製造工業にはイギリスの強力な出資があった。スペイン造船会社とヴィッカーズ・アームストロング会社というのは要するに一体であった。ペニャロジャ鉱業・精練会社に至っては説明する必要もない「フランス所有」。この企業は鉛関係のスペイン工業の大多数を独占していた。他方、スペイン商業に投資されたイエズス会の資本は六〇億ペセタに達した。そして、この何十億ペセタの渦巻く真只中に、ロマノネスやカンボやマルティのような人物に飼われた人食い鮫がいたのである。

スペインの生命である農業の状態については、次にスペインの全土地資源の分布表をあげる。

年間耕作面積	一五、七二九、八三九
休耕地	五、四〇〇、〇〇〇
耕作可能総面積	二一、一二九、八三九
牧場、放牧、山地	二三、六四二、五一四
生産可能総面積	四四、七七二、三五三
ヴァレアス、カナリアス両諸島を含むスペイン総面積	五〇、五一〇、二一〇

〔単位＝ヘクタール〕

スペイン二七州では総面積一九、六七二、九五〇ヘクタールで、四七・三九％が一―五ヘクタールを有する一、三九五、〇四八人の所有者に分割され、二九・三七％が五〇―五〇〇ヘクタールの所有者である四三、一一九人の所有者に属し、二五・二四％が合計四百万ヘクタール以上を有する六、八九〇人の所有者に属している。土地の平均分割では、三・四六％の所有者が五二・五一％の土地を所有していることになる。（別表省略）

スペインの主な荘園所有者の所有する面積の詳細をあげる。

メディナセリ公爵	七九、一四七
ペニャランダ公爵	五一、〇一六
ヴィリャエルモサ公爵	四七、〇一六
アルバ公爵	三四、四五五
ラ・ロマナ侯爵	二九、〇九七
コミリャス侯爵	二三、七二〇
フェルナン・ヌニェス公爵	一七、七三三
アリオン公爵	一七、六六七
エル・インファンタド公爵	一七、一七一
ロマノネス伯爵	一五、一三二
トレス・アリアス伯爵	一三、六四五
サスタゴ伯爵	一二、六二九

ミラベル侯爵	一二、五七〇	
レルナ公爵	一一、八七九	
		〔単位＝ヘクタール〕

スペイン共和主義者の選挙宣伝の中で、この国土の不当配分の解消は優先的な位置を占めていた。これは地方の大部分でカシキズム〔地方ボス支配〕の根源になっていた。この公約から、いわゆる共和国農地改革は登場した。しかし決して着手されるに至らず、一九三六年七月一九日、農民たちは直接行動することによってみずから脱出することを知ったのだった。

S・カノヴァス・セルヴァンテスは、著書『スペイン革命の歴史的発展』の中でこれに関して次のように述べている。

「共和国の農地改革は貴族に対する農地補償と引き代えに行なわれた。領王地だけが接収された。しかし、領王とは何かを決定する時に、領王地を起源とする地主を具体的にあげることは極めて困難であった。スペイン大公領の接収も考えられた。ロマノネスの利益に損害を与えず、彼が高利貸しで手に入れた広大な領地全体の所有者としてとどまるために、共和国政府内の彼の友人たちは、王の前で着帽できたスペイン大公位の特定個人の所有地だけが接収されるような抜け道を捜し出した。ロマノネスはこの儀礼の必要条件に合っていないようだったので、この巧妙な処置によって彼の農場をうまく農地改革の対象から外した。だが、それも不必要だった。なぜなら、討論の段階からすでにこの条項は破棄されたのだった。

八月一〇日以後、この法は世論の喧燥を前にまだ議会で審議中だったが、アサニャ政府は『共和国の敵の武装解除』を目的とするさらに急進的な政策に取りかかった。そうやって封建貴族を脅かし、体制に反対してきた運動の責任者と断定された人間の耕地を無償接収するという条項を法の中に入れた。誰がこれに該当するかを決定する機関は裁判所だった。彼らの中にもし封建領主がいれば罰せられた。他の者は自分の財産を平和に享受していた。

しかし、時間がたってみると、始められた裁判の結果、共和国に対する反乱運動の責任者と断定された者はほとんど財産を持っていないことがわかった。封建領主は腕を隠して石を投げるようなことをしていたのだから。結局、個人にしろ集団にしろ、犯人を発見することは容易でないことがわかった。一方、共和国当局も発見に大した興味をもってはいなかった。

農地改革は接収農地の賠償を基本としていたので、いまだに法は農地の分割買収に大部分譲歩していた。この分割買収は、予算の中で年五千万ペセタをとる権利をもっていた。これ以上は許されなかった。各農場が一万ペセタの価値を有するとして、多くは二万五千ペセタ以上になった。しかし、価格を前者に決めるとしても、年五千万ペセタでは毎年五千の農場の買収しかできず、スペイン全国に住む農民数は五百万に及んだから、読者は概算で、スペインで緊急の解決を迫まられている問題の解決に要する年数の見当がつくだろう。悲惨な我が国農民の精神的、物質的衰弱状態は、共和国が、支配階級の利害の暗躍する強制的な机上の空論に期待しないで、全ヨーロッパにはすでにはるか以前から法によって制度化され確立していながら、スペインだけが悲しむべき例外となっていた改革を実行することを、要求していたのだった。」

（カノヴァス・セルヴァンテス『スペイン革命の歴史的発展』一四七―四八ページ）

こういう経済状態の中で、スペイン労働者は一九三六年七月一九日を迎えたのだった。どのようにして彼らはその日を迎えたか？軍政が主要都市と地方とで打倒されると、労働者と農民は工場、企業、農場の接収を始めた。これらの接収の多くは、支配人や所有者が国外あるいは国内ファシスト側地域に逃亡した結果であった。接収は新しい経済体制の誕生をもたらした。それは総称的に「コレクティヴィズム〔集産主義〕」と呼ばれるようになった。

この体制は、根本に、放棄されるか接収されるかした工場や企業や農場の、労働者による共同開発が採用されていた。協力を望む工場主たちは他の集産体員と同様に編入された。と言うよりは、彼らには――小地主や職人の場合――賃金労働者を使わないという条件で、工業、あるいは、一家族の労働で耕作可能な区画の土地の個人経営が認められた。

集産主義体制は個人企業とある程度まで共存が可能だった。外国人の所有であるものは以前と同様に操業を続けていた。但し、組合の厳しい統制の下でではあったが。次節では、特に戦争目的のために国家あるいは地方自治体の管理の下に置かれた国有化あるいは自治体有化されたいくつかの企業をあげる。

集産主義は村によって、あるいは都市の集産化された種々の企業においてさえ、無限の多様性を見せた。すべての人間がやることの常として、臨機応変、国の置かれた（対ファシズム戦争という）例外的情況にみあった効果、未完成、成果、を収めた。これらの多様性に広く関わり合っていては一大冊が必要となろう。以下には最も顕著な例を拾い、集産体員自身の証言からの信ずべき話の大要を述べる。

カルタニャの農村における革命

バルセロナ農業集産体――一九三八年六月現在九〇〇―一、〇〇〇ヘクタールの土地を所有。土地はすべてモーター付きの多数の井戸の掘削による水の汲み上げで水田になった。産物は種々の市場に散在する販売店に分配された。労働は各地区およびサンス、アルモニア・デル・パロマル、プラ・マルティ、サリアによって組織されていた。集産体は地区の技術委員会ならびに企業評議会を有していた。小地主は集産体に加入した。各地区に灌水器が設置され、古い家畜小屋は三〇〇頭の役畜を収容できる広い畜舎にとりかえられた。日曜日は午前中だけだが、一週間とおして労働が行なわれた。戦線への動員による空白は敵の手に陥ちた地域からの避難民によって補充された。アラゴンから六〇〇人の避難民が加入した。みな経験に富む集産体員であった。動員された者には別の俸給が支払われた。

ヴィラボイ地区（バルセロナ）――集産体は、逃亡したり接収されたりした大地主の土地によって作られた。二五〇モハダの土地〔一モハタは約四九アール〕、二、〇〇〇人の集産体員からなっていた。集産体は一九三七年二月、一二頭の馬と同数の荷車をもって作られた。当時、各人の供出した結果として五〇〇ないし六〇〇ペセタの基金があった。日給の百分の六十が寄付されたのだ。あざみの収穫期の取入れをすると、週七〇ないし八〇ペセタの追加収入が保証された。初期の貯えは、馬の購入、広い馬小屋の建設、灌漑用モーターの購入、肥料、種子の購入にあてられた。一九三八年末には集産

体は五、〇〇〇人となり、週一五〇ペセタを得ていた。約一〇〇人の難民が家族とともに加わり、同等の権利と義務を得た。二〇〇人以上が前線で戦った。その家族は扶助を受けた。集産体は完全かつ無料の医療、薬剤事業の奉仕を受けた。市から三万二千ペセタで買収した農場を設けた。そこには、二〇頭の乳牛、二〇〇頭の豚、二七頭の飼育用小牛、大量の家畜が収容された。生産物。小麦年七万キロ、隠元豆三万七千キロ、馬鈴薯三〇万キロ、果実類五〇万キロ、野菜約三〇〇万キロ。

ヴィラデカンス地区（バルセロナ）――生産物は桃、梨、りんご、その他の果実、馬鈴薯、そら豆、キャベツ、ブロッコリ、ちさ。「カルデロン農場」（三〇モハダ）と「ロハ農場」の接収。「ロハ農場」の敷地は学校建設のためヘネラリダッドに譲渡。他の接収地の一つは「サン・ガブリエル農場」で、農事試験場用地と集産体の役所にあてられた。労働は四地区に組織化された。各地区で主任技師の資格をもつ者一人ずつが置かれていた。これらの代表者は運営評議会とともに労働を調整し、集会の決議を実施させた。集産体員はそれを自由意思で行なった。ブルジョアのためだけしか働かない者が五、六人いた。集産体は一九三七年末、二七〇モハダの水田と四〇〇モハダ以上の畑地を接収した。トラクター、刈り取り機、小牛六頭、豚三〇頭、らば四〇頭を持っていた。養鶏場を作った。年収は二〇〇万ペセタを上回った。運転資金は集産体とその生産者との改善のために使用され、その上、戦争物資にもあてられた。前線で戦っている六〇人の同志のことを忘れはしなかった。

レリダ――集産体は各人の家庭にあるすべてのものの供出によって建設された。収穫物、役畜、機械類、土地、鶏、等。一九三七年末には一〇〇家族が加入した。そのうち約六〇家族はレリダ出身で、残りは侵略された地区から来ていた。合計約四〇〇人だった。約三〇〇ヘクタール、一日平均約六〇〇人の耕作可能者がいた。乾草、紫うまごやしを産した。大量の牛、馬、豚、その他の家畜を飼育した。高地に三〇〇平方メートルの牧地をつくり、うさぎを飼った。使役と運搬用の一〇組のらばがいた。遠距離輸送には一台の貨物自動車を使った。大量の野菜が、集産体員の需要を満たした上で、移出されていた。当時の収穫は、穀類約二五万キロ、とうもろこし約一千カルテラ〔一カルテラは約一三〇リットル〕を集産体員に保証していた。集産体は次の方式で家族給を定めていた。独身者は五〇ペセタを得、そのうち二五ペセタを正貨で、残りを共同食堂の費用にあてた。子供のない既婚者は六〇ペセタを、子供のある既婚者は七〇ペセタを得た。各家族は二人目の働き手の労働一時間につき四ペセタを保証された。一つの協同組合が経営されていた。そこでは集産体員は消費通帳によって必要なすべてのものを手に入れることができた。週末には各家庭に賃金と消費との間に生じた差額が手渡された。野菜は自由消費で、統制されてはいなかった。品物は商店よりも安く入手できた。

プラ・デ・コブラ――住民二千。一部はマルティ・リョパルト紡績工場にいた。集産体は、一九三七年六月、約二七〇人が結成した。約五千ヘクタールを耕作していた。土地は七五パーセント生産性を増大した。決まった労働の時間割りはなかった。賃金は家族給だった。生産体員は一日五ペセタを受け取った。その上に、年令の規制なく家族一人当り二ペセタ支給された。穀類、野菜類、ぶどう、はたんきょう、はしばみを産した。需要の余りは外部に売った、というより交換した。卵用種の鶏五〇〇羽を飼う農場があった。牝牛九頭、小牛六頭、闘牛一頭がいた。教会に倉庫を置いた。食料品、野菜、塩魚、肉の共同店を作った。農機具に不足していた。労働者によって集産化された紡績工場は、原材料および化学原料の不足による危機の一時期を経験した。労働者はCNTとUGTに属していた。

オスピタレート・デ・リョブレガト――集産体制によって耕作されていた土地の面積は一五平方キロメートルあった。男女一千人以上の集産体員がいた。賃金として週九万ペセタ支出されていた。一九三七年の隠元豆の収穫は五五万五千キロに達した。土地は三八区画に分けられ、三五が水田で残り三区画が畑地だった。集産体結成以来、新事業の建設における全体的改善費用として週七千ペセタが支出されてきた。一〇カ月間に総額一八万ペセタの機械類が購入された。その運営をよく示す表がここにある。

一九三六年九月―一九三七年八月

	収入	支出
第一四半期	四三二、七一〇・三四	四一六、九三七・〇九
第二四半期	九一〇、七五六・八一	七九四、六二八・五一
第三四半期	一、六五三、〇四五・二〇	一、三一二、三〇五・一〇
第四四半期	二、〇〇七、九九二・八〇	一、六四三、七七三・〇五
計	五、〇〇四、五〇五・一五	四、一六七、六七九・七五

〔単位ペセタ〕

集産体は、前線に三万ペセタに相当する約八貨車のあざみと貨物自動車数台分の野菜を送った。それらを必要としている他の集産体にも協力した。四半期ごとに総会が開かれて成果を検討し、新しく必要なものを決定した。この集会に先だって運営評議会は集産体員に詳細な決算書を提示した。この運営評議会は五人の同志からなり、各地区の組合と技術者二名の代表に補佐されていた。技術者代表の報告によって、運営評議会は、毎日、オスピタレートとバルセロナの市場に出さなければならないものを決定した。集産体員たちは、頻繁な洪水の襲来に自治体としての結着をつけるため、リョブレガト河岸に運河を掘る計画を立てていた。集産体員のうち約六十人を除いてみなCNTに属していた。土地の集産化は全面的に行なわれた。生産物の輸送のために一台の貨物自動車が購入された。

アンポスタ――住民一万。米作地帯。運動の初期から土地は耕作者の手にあった。彼らの大部分がCNTの加入者であった。集産体は、一九三七年初め、この地方の一、二〇〇人の耕作者の大部分を擁していた。仕事のために、トラクター一四台、脱穀機一五台、馬七〇頭があった。土地は自治体有化されていた。誰をも搾取しないという条件で、個人労働の権利が認められていた。一九三六年九月の収穫は原米三六〇〇万キロに達した。原米一〇〇キロにつき精米六〇キロがとれた。すべての近代的設備をもつ養鶏場を経営していた。その額は二〇万ペセタと計算されていた。豚、牛、羊の飼育が行なわれていた。集産体には乳牛六〇頭がいた。建築部門も集産化されていた。この部門はモザイク工場一、石膏炉一をもっていた。大衆興行と他のいくつかの同業団体も集産化された。学校は数にして一五増えた。教育は義務制だった。成人用の六学級と学生食堂と技術・職業学校がつくられた。その上、大切な公共図書館がつくられた。前線には五万ペセタ相当の生産物が送られた。三〇〇人以上の志願兵がこの村から反ファシズム戦争に送られた。さらに、侵略された全地方からの一六二人の避難民を世話していた。消費組合は

古い教会の中に設置された。住民の大部分がこの組合で購入した。ここでは週一万二千ペセタの売上げがあった。自治体は四五人の老人を世話していた。住民は一種のコミューン体制で生活していた。実施された事業の中には、飲料水浄化事業、サナトリウム一と病院一の建設がある。住民の所有物は自治体有化されて、安い料金で隣人の使用に供せられた。塩田は自治体によって接収されていた。CNTが優勢だったが、自治体内では運営業務をUGTと分担していた。自治体は毎年全体集会を召集した。そこへは、現有の自治体基金のよりよい使用の決定のために住民が参加した。

オリオルス――ヘロナ州の小村。運動が始まったとき、四四人の住民からなる二三家族（大部分は小作人）が各自の土地ならびに家畜・農機具を共有化し、集産体を結成した。集産体は、一九三七年初め、次の規約によって運営されていた。

「前文　a　集産体の同志はすべて次のことを忘れてはならない。すなわち、集産体によって、環境の不平等から生じる経済的差別は消滅した。b　環境の困難が消滅したので、集産体は一大生産家族となる。しかし、相互に尊敬しあい、消費単位たる各家庭に最大の自治を認める。

集産体の当面の目標は、集産体の成員によってなされた次の契約を含む。

a　集産体内で提起された疑問や問題が一度検討され、自由討論で解決されたなら、決定され承認された決議は全員によって最大の規律をもって実行される。

b　『一人が万人のために、万人が一人のために』という人間的無政府主義的モットーの下に、共同体の成員は、家族と年令の区別なく、全員の経済的社会的福祉の達成のために努力しあう。集産体は共同金庫を設置し、それによって（能力に従って）大集産体家族のすべての必要を満たすよう努力する。個人的経費も共同金庫によってまかなわれるが、これらは常に集産体固有の社会倫理の原則に一致すること。個人的経費は常に正当とみなされる。集産体の一員が不健全な利己主義に動かされて共同財産たるものを乱用すれば、評議会は集会に報告しなければならない。集会は唯一の権威者として各問題にふさわしい処置を決定するであろう。

c　集産体の共同金庫はその成員の基本経費（青年の当然の娯楽やその他の装飾的配慮）以外に、次の方式によって週ごとの家族給を設定する。

既婚男子五ペセタ、既婚女子三ペセタ、一五歳以上の独身男子八ペセタ、一二―一五歳の少年三ペセタ、八―一二歳一ペセタ。一五歳以上の女子三ペセタ。

各年度の終りに、集産体の成員の必要品を支給し終わったら、前年度の流動剰余金は次のように使用される。

1　住宅の改善と衛生化
2　農業用機材の購入
3　牧畜業生産の振興増進
4　養鶏場の設置
5　全員の才能が解しうる文化を普及することによって、住民にさらに高度な文化を奨励すること。この事業のために、演劇、映画、集会、ラジオ、新聞ならびに科学的道徳的普及パンフレットを活用する。

集産体は、あらゆる手段を通して、人種と肌の色の差別なく、世界の全労働者との精神的物質的連帯関係を維持するよう努力する。

集産体の門戸は、一度集産体の利益を理解して大家族に加わろうと望む農民隣人を迎え入れるために、常に解放されている。」

付　記

最近、南フランスに亡命中のホセ・ペイラツから今村五月に便りがあり、自分の『スペイン革命におけるCNT』を訳出してくれるのは有難いが、第一巻に数年もかかるとはどういうことだと、きびしい苦言を呈せられた。それに対して、今村が「私はプロのアナキスト活動家ではない。生活のための仕事や家事にあくせくしながらやっとの思いでこの本に取り組んでいるのだ」と弁明したところ、折返し、ペイラツから返事が届き、それに「私は一度だってプロのアナキストだったことはない」と書いてあったという。

以下、ペイラツからの手紙によって、彼のプロフィルを紹介しよう。

ホセ・ペイラツは現在六十四歳、一九〇八年の生まれである。八歳から六十歳まで、肉体労働者として働き、初等教育も卒業しておらず、「すべては自分自身に学んだ」と書いている。

十四歳から労働運動に飛び込み、一九三六年七月の革命に参加、前線で闘ったこともある。革命の敗北後、フランスに逃れ、一九三九年十二月まで南フランスの収容所で暮らし、その後、南アメリカへ亡命した。一九四七年にフランスに戻り、在フランス亡命CNTの書記長を二度つとめた。また、一九四七～四八年に、一度は一カ月、二度目はわずか八日間、スペイン国内の抵抗組織と連絡をとるために、にせのパスポートでスペインに潜入、山中ばかり通って無事「帰国」したこともある。

フランスでも二度投獄されたが、個人的に弁護してくれる人がおり、フランコに引き渡されるのを免れた。大著『スペイン革命におけるCNT』全三巻（一九五一～五二年）についで、一九六四年には『スペインの政治危機におけるアナキスト』を発行した。この本をN・チョムスキーが「非常に有益な書物」と評していることは、本誌十二号で紹介したとおりである。

また、最近、ヴィクトル・ガルシアがヴェネズエラのカラカスで刊行している『ルタ』の双書に『コミュニストとアナキストの対立』（一八四八年から最近までの小史）を執筆した。もっともこの仕事はあまり気が進まなかったらしい。

ペイラツはガルシアの別宅の管理人を兼ねて住んでおり、心臓の持病のため肉体労働がむりになったので、夫人のパンタロン製造の手伝いをして暮しをたてている。ガルシアも亡命スペインのアナキストで、大分まえに日本に来たこともある。現在、ヴェネズエラのある航空会社に務め、休暇の時に割引運賃でこのフランスの別宅に現われるのだ。

ペイラツの唯一の趣味は絵を描くことで、彼と同郷（ヴァレンシア）のソロジャを好み、三大家のなかでは、「ピカソはフランコの道化役者だ、私はダリの方が好きだ」と言っている。

編集後記

禁断の木の実を味合った人間が楽園を追放されたという有名な旧約の説話がいつ成立したのかは知らないが、そのことを語った人間の眼力は大変なものだったにちがいない。

未開社会がだんだん文明社会に接近してくるにつれて、人間の姿はせせこましく、みすぼらしくなってくる。それに正比例して、物質文化は高度化する。今日のように高度の物質文化にどっぷりひたって生きてきたわれわれが、どこまでそれを拒否しきれるのか、単純な拒否、単純な反対は、かつての左翼のそれとおなじ質でしかあるまい。

機械との共棲こそ、こんごの人間の課題だといったのは林達夫氏だが、禁断の木の実を食いながら、なおかつ楽園に居すわれる、というのは虫のよすぎる注文なのだろうか。

若い頃に愛読したストリンドベリの『ペール・ギュント』の一節に、「あれか-これか」ではなく、「あれも-これも」の弁証法をすすめるくだりがある。これはストリンドベリが到達した英知であろうが、プルードンの弁証法にもこれと共通した質があるようにおもわれる。

今号では前号につづいて、プルードンの弁証法を、ギュルヴィッチによって追求してみた。これからも追求の手をゆるめぬつもりだ。

◇

九月十六日、渋谷山手教会で大杉栄、伊藤野枝追悼講演会が開かれた。ちょうど台風二一号の余波で雨風がはげしかったにもかかわらず、会場は満員の盛況であった。会場を埋めた青年男女が大杉や伊藤を通じてつかもうと模索しているものはなにのか。

完結した諸伏恒「大杉栄の革命理論に関する私論」は、彼らの世代の一人がまとめた最初の包括的な大杉論である。ここに新しい世代の関心の所在を読みとることができるだろう。

大杉は一人だが、それが同時代に、またつぎの時代、そのまたつぎの時代に、千人になり、万人になっていく、そうなりうるところに彼が卓越した人物たるゆえんがあるのだろう。われわれはつぎつぎに、新しい大杉を作っていかなくてはならないのだ。

◇

累積する赤字に抗し切れず、ついに値上げせざるをえなくなった。十三号の製作原価は一冊当り一七二円。委託の場合は七～七・五掛だから、平均して全部売れても二～三万円の赤字になる。それが委託代金の未回収、売れ残りなどの悪条件が重ると赤字は十万を越える。乞諒承！

黒の手帖 第十四号
一九七二年十一月二十日発行

編集発行人・大沢正道

発行所・黒の手帖社 東京都新宿区北山伏町三三（大沢方）郵便番号一六二
振替・東京一〇二四六五

印刷所・株式会社清水印刷所 東京都新宿区戸塚町三丁目一五〇

定価・二五〇円
送料七〇円
二号分前納・六〇〇円
四号分前納・一二〇〇円
（いずれも送料共）